

新型コロナウイルス感染症拡大からみえてきたこと

横田 尚俊

(よこた なおとし)

人文学部評議員

3年余に及ぶ新型コロナウイルス感染症の拡大・流行も、ようやく沈静化しようとしている。この感染症の拡大は、日本社会でも、それ自体による多大な人的被害(厚生労働省によれば、2023年5月9日時点で、累計陽性者数が約3380万人、累計死亡者数が約7万5千人)にとどまらず、さまざまな社会現象や「社会的災害」を生み出した。感染拡大初期には、マスク不足を契機として一部商品の買い占めが生じ、感染者および感染者が属している集団への攻撃・差別なども発生した。政府・自治体により「緊急事態」や「まん延防止等重点措置」の宣言がなされると、行動の自粛を迫る強い同調圧力が社会を覆い尽くしていった。

アメリカの社会学者、ソローキン(Sorokin, P. A. 1889~1968)は、疫病、飢餓、戦争・革命といった惨禍(Calamity)が人間社会に大きな影響・変化を及ぼすと指摘し、これらの惨禍は、将来においても、出生率の低下や移住の増加、社会移動(階層移動)の増大、離婚の増加と家族や基礎的社会組織の再編成、芸術・文化活動における革新などの社会・文化変動をもたらすだろうと述べた(ソローキン【1942】、大矢根淳訳『災害における人間と社会』文化書房博文社、1998年、193-202頁)。

こうした考察の正否は改めて検証すべきであろうが、コロナ禍という疫病を経たわれわれも、現在大きな変革期に直面しつつある。その一つが社会・文化のデジタル化(Digital Transformation)である。

20世紀終盤以降、パソコン、携帯電話・スマホなどの普及とともに、テキストや画像・映像、音声などのデジタル化が急速に進行し、いまやわれわれの生活はデジタル・コミュニケーションを前提に営まれるようになった。さらなるデジタル化によって、社会全体の効率化・合理化のみならず、新たなサービスやビジネ

スの創出とそれによる経済成長が促され、「国民が安心して暮らせ、豊かさを実感できる社会」が実現するというのが『情報通信白書』(令和3年版、9-10頁)などに記されているDXの将来イメージである。

現状をみるにそんないいことづくめの話には疑問がわいてくるが、それはともかく、コロナ禍が始まってまもなく、大学を含めた教育現場で急速に普及したのが、テレビ・web会議ツールだ。この便利なツールが導入されると、オンライン方式でいくらでも効果的な授業をすることができる、対面にこだわるのは時代遅れだ、との言説さえ流布するようになった。

ところが、オンラインで孤独な自宅学習を強いられた全国の大学生たちから、キャンパス内に足を踏み入れることもままならない状況に苛立つ声が、大波のように湧き上がったのである。オンラインやSNSだけでは友だちができない、部活やサークル活動を楽しみにしていたのに、等々。

コロナ禍が明らかにしたのは、人間の身体性・身体感覚の重要性だ。若き多感な時代に、同年代の仲間たちとひとつのキャンパスで出会い、さまざまな時とともに過ごし、お互いが切磋琢磨することによって、どれほど多くの充実感や成長の糧を得ることができるだろうか。

コロナ禍は、社会・文化の大きな変動を加速する一方で、大学という場所の本質を、そして人間が生きるということの本質をも、再認識させてくれたのではなからうか。